

(肝属郡根占町川北字千束)

位置と環境

千束遺跡は町役場から北へ約1kmのところであり、大根占町との町境の小丘陵が遺跡地となっている。この丘陵は標高70m程であるが、海岸寄りに最高地点があり、東側は標高約43mの平坦な地形を呈し面積が2haある。

遺跡地は海岸からの直線距離が約500mあり、周辺の沖積低地からの高さは約30mを測る。

調査の経緯

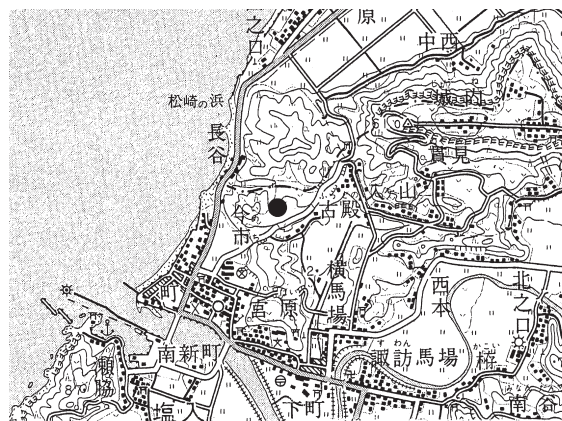
千束遺跡は昭和15年から昭和47年まで間に学術研究のための調査を合計6回実施している。

これらの調査は山口大学や鹿児島県考古学会会長河口貞徳らによって行われている。

遺構と遺物

昭和47年調査では2軒の竪穴住居跡が検出されている。1号住居跡からは炉跡はみられなかったが、中央より南東側の床面に15cmから20cmの礫が5個集めて置かれ、この間から木炭が検出された。

住居跡内からは完形の甕形土器、壺形土器や甕形土器などの破片、軽石加工品などが若干出土している。完形土器は横倒しの状態で出土し、大形の甕は口を東に向けて横倒しとなり、土圧でつぶれて、口縁部が展開した形となっていた。



第1図 千束遺跡の位置

2号住居跡の形状は、隅が丸く長方形で1号住居跡と似た形である。住居跡の北東隅に基部幅1.5mの弧形の張り出しが構築され、張り出しの長さは約60cmでこの部分の内側床面は掘り込まれて長径80cm、短径60cm、深さ13cmの楕円形の窪みとなっている。柱穴と思われるものは、住居跡の内側に接して南西部と北東部に各1個あり、南西部のものは径30cm、深さ22cm、北東部のものは径40cm、深さ30cmであった。

住居跡内から出土した遺物は、土器片、鉄製品、木の実、獣骨などがある。

本遺跡から出土した土器は、古墳時代とされる成川式土器を主とし、ほかに若干の土師器と須恵器が出土している。

石器などには石斧と軽石製品があり、石斧は打製



写真1 千束遺跡近景

石斧で石材は安山岩で土掘り具として使用されたと推定される。

本遺跡からは鉄器も出土しているが、そのほとんどが鉄鏃と思われる。

そのほかの遺物には、貝類、動物骨、木の実などが出土している。貝塚でもないのにこれらの遺物が残存したのは、遺跡の土壌が火山噴出物の堆積によるもので、粒子があらく、水はけがよかったことが一つの原因であろうと思われる。

特徴

この千束遺跡では、鉄製の鏃などの資料が見つかり見張所的な高地性集落であることが確認されたと報告がある。

この時代は大和の中央政権が確立された直後で地方豪族の併合をはじめたころであった。このため防

御的な生活の場（見張所的）であると推察できる。

このため比較的生活のしにくい高台にあり、狩猟用の鏃に比べ、長さ10cm程度の戦闘用の鏃などが発見された。また、モミなどは出ていないが、スキ、クワ代わりにしたと思われる大きな石斧があることや、貝殻、獣骨からみて農耕、漁労、狩猟をしていたと考えられる。

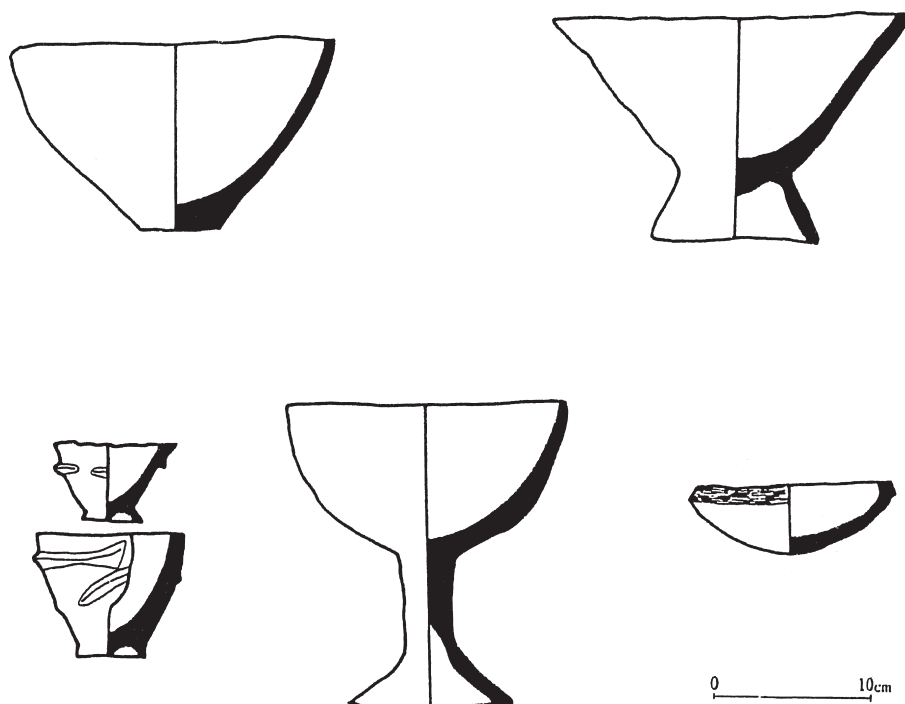
資料の所在

出土遺物は、根占町教育委員会に保管されている。

参考文献

根占町1996「第二章見張所的な高地性集落 千束遺跡（調査の結果）河口貞徳」『根占郷土史一復刻改訂版一』

（下大川司）



第2図 出土遺物